

もど子と人婦

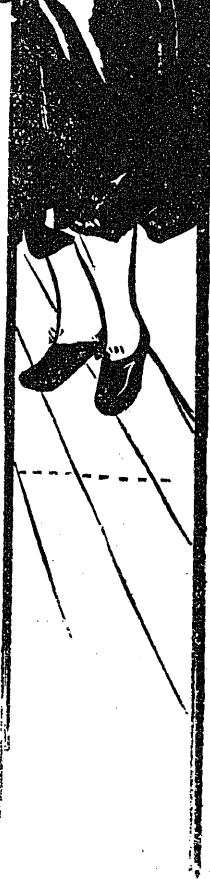
號貳・第卷六第

もど子

金の手斧

やまととの翁

むかしく、まづある處に、ご
くく 正直な、樵夫が居りまし
たとさ、毎日く、山へ行つて
は、鐵の手斧でもつて、ちよん
くちよんくと木を伐つて居



りました。

ある日のこと、この樵夫、名前は正助といふのですが、いつもの山へ行つて、河の側で、ちんく、ちんくと木を伐つて居ました所が、ひょと間ちがつて、其手斧を河の中へ落としてしまいました。

手斧は重いもんですから、すぐ、ぶくくくと水の中へ沈んでしまひました。さあ、正助は、困りました。大事の大事の手斧をおとしてしまつて、もう、これから、木を伐つて働くこともできませぬ、そうすると、家に居る年老つたお母さんや、小さい太郎さんや、お玉さんに御飯を食べさせて行くこともできませぬから、正助はさあ、どうしたら宜いかと、いろいろ考へて見ましたが、

どうにもする事が出来ませぬから、一人其處に座つて、泣いて居りました。
しますと、其河の中から、一人の美しいお姫様が、ぼーっと出て
来て

音
音

「お前、何故泣いてるの?」

といつてくれましたから、正助は

「へい、たつた今大事のく手斧をこの河の底へおとしてしまひましたので、これから木を伐ることができませぬから、家のお母さんや、弟の太郎さんや、妹のお玉さんを養つて行くことが出来ないと思つて、どうしたものだらうと、つらくつてくしかたがないのです」

と言ひますと、お姫様は

「おや、そう?! じや泣くのはお廢し、私が今とつてきて上げるか

ら

といつて、見て居る中に、水の中へもぐつて行つて、びかくする

金の手斧を取つて出て来て、

「お前の落したといふのは、これなの?」

といつて見せましたので、正助は

「いや、私のは、そんなに立派なんじゃありませんね」

と答へますと、お姫様は、又さぶっと這入つて行つて、今度は眞白な銀の手斧をもつて出て来て、

「ではお前の落したといふのは、これ?」

といつて見せますと、正助は又

「私ののは鐵のです、そんな立派なんじゃありませんね」

そこで、今度目、お姫様が這入つていって、取り出して來たのは、
丁度、正助の落したといふ鐵の手斧でしたから、正助は、お姫様

に大層御禮をいって、その手斧を貰らひました。すると、お姫様は

お前は、中々正直だから、この金の手斧も、銀の手斧も、私から上げませう、これを賣るとお金ができるから、それで、お母さんや、小さい子供たちを樂にさせることができませう」

といふかと思ふと、奇麗なお姫様は、水の中へ消へて仕舞ひました。

それから、正助は、金と銀との手斧を賣りに行きまして、大層にお金を儲けたもんですから、お母さんや子供たちに、美しい衣服や食物や、奇麗な御本などを澤山お土産に買って參りましたとさ。しますと、この話を聞きつけたのが、隣りの慾深老爺です。正助

の奴、甘い事をした相な、よし／＼己も一番金の手斧を貰つて來よう、と獨り考へながら、ある日のこと、其川のふちへ行つて、自分の手斧を出して、ちよいと木を伐る眞似をして、態と夫を川の中へどぶんと落してしまつて、そしてわあ／＼大聲を上げて泣いて居ました。

すると、其聲を聞いて、美しいお姫様が、片手に金の手斧を持ちながら、水の中から、出て来て、

「お老爺さん／＼お前さんの落した手斧はこれなの？」

と見せました。お老爺さんは、「そらおいでなすつた」と思ひながら、いきなり

「はい、はい／＼それが、この老爺ので」

といつて、兩手を伸ばして取りに行きますと、お姫様は、

「あら、そうじやない

でせう、このお老爺さ

んは嘘ばつかし!!!

と仰つたまんま、其金の手斧を持って、また

斧までも失つてしまひましたとさ。

水の中へ這入つて仕舞ひました。

で、この慾張老爺さんは、金の手斧を貰へなかつた許りか自分の手



めでたしく